

役割意識の差異に着目した企業内会議の事例研究

—相互主観性理論を手がかりとして—

教育創発学コース 武藤 真理子

The case study of an office meeting focusing on the difference in the consciousness of role:

—Based on the intersubjectivity theory—

Mariko Muto

The purpose of this case study is to examine the dialogue in an office meeting, focusing on the difference in the participants' consciousness of role, based on the intersubjectivity theory.

In an office meeting, since participants usually possess diverse standards of value, their dialogue is often at cross-purposes; nevertheless, they can occasionally give validity to the topic that they discuss, even though the situation in all office meetings is identical.

According to Nakada, in "the dialogue of one person versus many people" whose listeners do not "judge actively", the validity of topics of discussion will be suspended until all other participants of the dialogue subjectively identify the validity. Based on this consideration, we clarify that an "atmosphere of validities" remains changeless in an office meeting, even when some participants hold opposite opinions.

This study elucidates that in the dialogue of an office meeting, "an atmosphere of validities" gives validity to topics of discussion and the participants change their consciousness of role.

目 次

はじめに

第一章 会議の参加者にみられる層構造

第一節 会議における対話

第二節 企業における会議と参加者にみられる層構造

第三節 異なる層を基盤とする者同士の対話

第二章 妥当性の雰囲気

第一節 妥当性の雰囲気と参加者の層

第二節 会議における妥当性の雰囲気

第三章 妥当性を付与する他者の存在

第一節 対話の基盤となる層の変容

第二節 参加者による共同の経験

おわりに

はじめに

企業は、経営者から末端の社員まで、経営の責任に応じた順位によって細かく階層化された構造を備えている。それゆえ、各層において各種の会議が開催されることになる。企業内には、役割や職種、目指される

目標が共通する人々が集まる会議もある一方で、例えば、営業と制作の担当者というように、役割も職種も目指される目的も異なる人々が共に集まり、話し合うことになる会議も存在する。

2010年10月から筆者が観察させていただいているXテレビ局のウェブ編集会議は、異なる職種の参加者が集い話し合う場となっている。もともとテレビ局のウェブサイトには、番組制作者、ディレクター、デザイナー、更新担当者という異なる四つの役割を担う人々が関わり合っている。仕事の手順としては、番組制作者が、ディレクターにウェブの制作を依頼し、ディレクターは、番組制作者の意向を引き出すとともに、それらを活かしてどのようなウェブページを制作するかについてのアイデアを持ち寄り、それをデザイナーに伝える。デザイナーは、番組制作者の意向とディレクターのアイデアを画面上に実現させる。こうして番組ウェブサイトが出来上がり公開されると、それ以降は、番組制作者が更新する部分の原稿を作り、更新担当者がそれをウェブ上に入力することになる。

以上のことからわかるように、ディレクターの仕事とは、依頼者とデザイナーの間に立つことで、番組サ

イト制作の仕事をスムーズに進めることである。その際、仕事の依頼者である番組制作者の意向や期待が最優先されるため、番組サイトのクオリティよりもアップロードの迅速さや期日に間に合わせるという意味で、「スピード」がより大事になる。他方、デザイナーの仕事とは、委ねられた意向やアイデアを自らの中で昇華した作品を、現実の画面上に作り上げることである。その際、画面上の作品としての番組サイトが最優先されるため、番組サイトの「クオリティ」が最も大事になる。ウェブ編集会議には、ディレクター、デザイナー、更新担当者が参加している。更新担当者の業務がデザイナーに近いことから、大別すれば、ディレクターとデザイナーという異なる職種の人々がウェブ編集会議に参加している、といえる。では、このようにそれぞれ優先されるべき価値基準の異なるディレクターとデザイナーが参加する会議においては、どのような対話が生じることになるのであろうか。

第一章 会議の参加者にみられる層構造

第一節 会議における対話

企業の会議は、複数の参加者によって、話し合いや報告が行なわれる場である。すなわち、複数の参加者間における対話の場である。したがって、本稿においては、相互主観性理論と対話哲学を架橋しながら対話を実際に生きている者の立場に立って対話を捉えている、ワルデンフェルスと中田の記述を手がかりとして考察する。

ワルデンフェルスは、フッサールの相互主観性理論において問題とされた他者経験を、「世界の経験と自己の経験」という二つの経験のどちらか一方ではなく、世界という私の外側でも自己という私の内側でもないような私の「内と外との中間にあるもの」(p.116)¹⁾と捉えている。このような他者が、「事象的かつ人格的な二重の方向性によって、対話のなかで或る独特な機能」(p.128)をもつことから、ワルデンフェルスは、「事象関係、他者関係、およびその両者のなかに含まれた自己関係」(p.127)という三重の関係項が対話の共同作用を構成している、とする。そうである以上、対話は、我と汝の二者関係ではなく、私と他者と事象という三つの観点から捉えられなければならない。しかも、「対話においてやりとりされることは、事象そのものではなくて、事象の意味するところのものである」(p.131)以上、事柄だけでは、もはや対話を捉えることができないことになる。

中田は、授業における教師と子どもたちとの対話に基づき、対話哲学によって真の対話とされる、我と汝の関係を捉え直している。中田によれば、授業における対話は、「教師がクラス全体に対して働きかけをし、子どもたちは集団の一員としてその働きかけに対応している時」²⁾の「一対多の対話」³⁾と、「教師と子どもが相互に個として向かい合っている時」⁴⁾の「一対一の対話」⁵⁾とに分けられる。一対一の対話においては、「対話の事柄ではなく、事柄への彼らの関与の仕方が問題」⁶⁾となり、他方、一対多の対話においては、「事柄それ自体が彼らにとって主題的な問題」⁷⁾となっている、とされる。しかも、一対多の対話においては、「或る一人のパートナーと一対一の対話を直接生きている時にも、己れが委ねたことを間接的に引き受けている多数の他者の存在が意識されている」⁸⁾、という間接的対話が生じている。もとより対話哲学においては、「我に対する汝の非制御性において、汝が我から委ねられたことを汝の自由において引き受けている時に、初めて一対一の対話」⁹⁾が実現されることになる。ところが、中田によれば、授業における一対一の対話においては、対話を行なっている彼らの関与の仕方が問題となるために、対話の相手に対する非制御性にもかかわらず、両者の対話行為は、「相互に補完されて完全な対話行為となるという意味で、相互に依拠し合っている」¹⁰⁾ことになる。他方、間接的対話を生きている子どもたちにとっては、事柄それ自体が問題となっているために、「発言やその妥当性は対話の文脈に依存している」¹¹⁾ことになる。

ワルデンフェルスと中田の以上の記述から、対話においてやりとりされている事柄が表しているところの意味、そして、事柄そのものに妥当性を与えている対話の文脈、さらには、対話を行っている者の関与の仕方といった観点まで掘り下げなければ、対話そのものを捉えることはできないことが理解されよう。

第二節 企業における会議と参加者にみられる層構造

本節では、企業の会議における対話を成り立たせている基盤について考察する。中田の記述するような授業における対話とは異なり、企業における或る一つの会議の中で下される決定や判断は、当該の会議のさらに上位の会議の決定や判断に規定され、影響を受けている。と同時にさらには、下位の会議の決定や判断を規定し、影響を与えている。それゆえ、企業においては、このような層構造の中で各会議が行なわれることになる。

加えて、或る一つの会議とその参加者においても同様の層構造がみられる。例えば、責任者の役割は、上位の会議の判断や報告伝達であるとともに、当該の会議における決定権を持つことである。他方、下位の会議の責任者は、層の位置が異なる当該の会議においては一人の参加者にすぎない。ところが、こうした層構造において、会議の参加者は、参加者が所属するところの各部署に共通する層を共有しながらも、同時に、参加者の職種に応じた異なる価値基準を支える固有の層も有している。したがって、会議の各参加者は、参加者全員が所属するところの部署に共通の層の上に、各参加者がそれぞれ担っている職種に固有な層を形成し、さらに、その上に参加者の個人的な価値基準による層を形成している、と考えられる。参加者が、このように形成している層構造においては、階層が上になるほど、層を支えるところの価値基準は各参加者にとって切実さをともなって感じられることになる。そして、このような層構造を成す参加者同士が、対話におけるやりとりを通して、事柄を判断したり、決定していくことが生じている場が、企業における会議なのである。したがって、企業の会議とは、或る部分は共通する層を有しながらも、別の部分では異なる価値基準による層を形成する者同士が、それぞれに固有の価値基準をかけて、やりとりをするせめぎあいの場と捉えることもできよう。その際、参加者はせめぎあいながらも、最終的な判断においては会議の責任者の決定権が行使されることになる。しかも、参加者同士が同じ会社の同じ部署の成員であるという共通の層でつながっている以上、いわゆる物別れに終わったり、決裂するような事態はほとんど起こらない。言い換えれば、企業の会議における対話の中のせめぎあいは、ある程度の予定調和を含んだ、最終的に決裂しない範囲内において生起する、ともいえよう。

第三節 異なる層を基盤とする者同士の対話

本節では、異なる層の上に立つ参加者同士の対話においては、すなわち、スピードとクオリティといった優先されるべき価値基準の異なるディレクターとデザイナーにおいては、どのような事態が生じることなのかを、具体的な事例を通して考察する。

【2xxx年12月27日 ウェブサイトのクオリティ】

田中さん（男性、30代前半、仮名、以下同様）による更新チームの報告を受けて、デザイナーチームのリーダーである佐藤さん（男性、30代半ば）は神妙な面持

ちで報告しはじめた。「その件とも関わってくるんですけど、この間も〔システム管理者の〕中川さんが来て、『最近クオリティはどうなの？』って言われるんですよ。でもクオリティについては僕らでも、コントロールできないことがあって…」とポツリポツリと話す佐藤さんに対して、向かいに座っていた田中さんが嬉しそうに身を乗り出して、「どこら辺が〔コントロールできないの〕？」、と質問する。「一つでもエラーがあれば、それでもクオリティは落ちるわけだし、昨日も〔デザイナーの〕さゆりさんがぶち切れていたんだけど、これ誰とは言いませんけど、スポーツ〔番組サイトの担当者〕が勝手に情報を更新して…」と話しながら、そのときの怒りを思い出しているかのように佐藤さんの口調はだんだん熱を帯びてきた。（中略）田中さんは、佐藤さんがここで言おうとしているトラブルが何のことなのかをすっかり理解した様子で、「〔ディレクターの〕江田さんは確信犯ですよ。あの人、デザイン〔チーム〕に不信感があるから」、とそれまで佐藤さんの訴えの中では伏せられていた、情報を勝手に更新したディレクターの実名をあっけなく口にしてしまう。すると、それまで抑えていた籠が外れたように佐藤さんは、「江田さんは、もしかしたらデザインが忙しいからって代わりにやっているのかもしれないけど、それによってクオリティがメチャクチャになるってこと知らないんだよ。なんでもいいから入れちゃって感じでやっている。こっちが手間かけてやっと更新しても、あっと、見たら情報が消えていたりするんだから、まったく。情報の整合性もとれなくなる。それで、中川さんにはこっちはクオリティがどうのこうのとか言われるんだから、やってられない」、と一気にまくし立てた。（中略）この会議の司会者でウェブ編集長でもある相田原さん（男性、30代半ば）は、「江田ちゃんからすれば、デザイナーを待っていると情報が遅くなるから少しでも早く入れようとやっていて、デザイナーからしてみればクオリティが下がるって、そういうことでしょう」、と問題となっている事柄を今一度整理しようとする。（中略）元デザイナーで現在ディレクターの勝田さん（女性、30代前半）が、「どういうふうに動いているかお互い〔＝江田さんもデザイナーも〕知らないんだ」、とトラブルの一番の問題点を指摘する。（中略）佐藤さんは、「なんのために職能があるかっていうこと」、と言い、この日最も大きな苛立ちの表情を顕わにした。相田原さんは、佐藤さんを宥めながらも、「彼〔＝江田さん〕はベストを尽くしているんであって、早く見られる

ページを上げたいということだと思っただよね」
と江田さんを庇い続ける。

当該の事例時の会議に参加していない江田さん（男性、30代半ば）は、番組制作の現場に誰よりも足しげく通い、番組制作者の声を聞き、制作現場の期待を大切にしているディレクターである。江田さんは、ウェブ編集部に異動する前までの約5年間、制作局スポーツ部に所属し、たった一人でスポーツ関連番組のサイトを立ち上げるという経験をしていた。苦勞してスポーツ部の番組制作者と信頼関係を築いてきた江田さんは、彼らが何を望んでいるのか、スポーツ番組に対して自分がどのように役立つことができるのかを常に考え、強く意識している。相田原さんから請われて、当該の会議が行なわれる約1年前にウェブ編集部の一員となっても、江田さんの基本的な姿勢は変わらなかった。彼が目指していたのは、一分でも一秒でも早く情報をアップロードすること、すなわち、スピードを優先することによって、スポーツ番組に有用なウェブサイトを制作することであった。

相田原さんは、江田さんの仕事振りをいつも高く評価していた。というのも相田原さんもまた、頻りに制作現場に顔を出すことで、現場の番組制作者と仲良くなったり信頼関係を少しずつ築いていったディレクターの一人であり、彼にとっても、制作現場の意向や期待、アップロードのスピードは最優先すべきことであった。したがって、当該の事例における会議において、相田原さんの価値基準を支えていたものは、江田さんと共通するディレクターという職種に固有の層であった、と考えられる。

他方、相田原さんが対峙することになるデザイナーチームのリーダーである佐藤さんと元デザイナーで現在ディレクターの勝田さんと更新担当者の田中さんは、それぞれ異なる立場にありながらも、コンピューターやインターネットのシステムに精通しているという点では共通している。というのも、ディレクターが人と向き合うことが多いのに対して、デザイナーはコンピューターというマシンと向き合うことが圧倒的に多いからである。そのため、デザイナーには、業務を遂行する上で、コンピューターやインターネットのシステムについて必要な知識があり、結果として、その知識はデザイナーとしての常識ともなっている。その意味で、佐藤さんと勝田さんと田中さんはそれぞれ異なる立場にいながらにして、デザイナーという職種に固有な層を共有している、と考えられよう。

したがって、当該の会議における対話において生じているのは、ディレクターという職種に固有な層の上に立つ江田さんと相田原さんに対して、デザイナーという職種に固有な層の上に立つ佐藤さんと勝田さんと田中さんの価値基準を賭けた一種のせめぎあいなのである。その際、それぞれの層の価値基準によって支えられているものが、一方では、「スピード」であり、他方では、「クオリティ」である。しかし、「スピード」と「クオリティ」という価値基準を賭けた両者の戦いは、どれほど話し合いをしたところで、簡単に決着がつくようなものではない。そうでありながらも、決着の難しい問題を会議の俎上に載せることができるのは、こうしたせめぎ合い以前に、そもそも会議の参加者全員がウェブ編集部に所属し、彼ら全員が共有するウェブ編集会議に共通の層を基盤として会議を生きているからであろう。

第二章 妥当性の雰囲気

第一節 妥当性の雰囲気と参加者の層

会議においては、そのつど参加者の立つ層に支えられる価値基準によってのみ、話題となる事柄に確からしさが付与されるだけではない。例えば、ウェブ編集会議は、すでに済んでしまった事柄の報告や連絡だけでなく、今後の方針や新しい企画といった未決定の事柄を話し合いによって決定する場ともなっている。その際、ディレクターやデザイナーという職種に固有な層において対話の基盤とされる価値基準とは異なる価値基準に確からしさが付与されることがある。次の事例は、勝田さんがウェブ編集部の「今年の目標」を提案した場面である。ところが、「今年の目標」を決める以前に、その前提となるべきウェブ編集部の価値基準とはそもそも何なのかが問題とされることになる。

【2×××年1月17日 今年の目標】

田中さん（男性、30代前半）は、番組サイトを制作する上で何が優先されるべきかが、明確に示されないことに我慢できない様子で、「う～ん、価値ベースが欲しい」、とじれったそうに呻いた。勝田さん（女性、30代前半）も、「今のところ、〔ウェブ編集部の業務は〕営業〔＝売り上げ〕と関係ないでしょう」、と言い、田中さんは「価値ベースが欲しい」、とくり返した。二人の訴えを聞いても、江田さん（男性、30代半ば）は、黙ったままであった。制作上の優先順位がはっきりしないことに、勝田さんも徐々に苛立ちをつ

のらせながら、「目標と努力と結果をちゃんと分析したい。今までは、ワーってやって消化されただけだった」、と要望と不満を口にする。(中略) そのとき、江田さんが、「番組が求めているのははっきりしていて、番宣 [=番組の宣伝] とか、いつ放送するかとかいった前情報」、ときっぱり言い放った。にわかには信じられないといった様子で、勝田さんが、「前情報?」、と聞き返した。そのため、江田さんは、「前情報。誰が出るとか、リンクを幅広く貼ったり。民放の〔ウェブサイトの〕レベルは高いけど、その中でもアクセス件数でうちの〇位というのは、そこに徹底的に力を入れているから」、とさらにはっきりとした口調でくり返した。(中略)

田中さんは、ウェブサイトの存在目的を初めて聞いたことに興奮した様子で、「こういうと、〔今まで〕モヤモヤしていたものがふっきれた」、と言う。勝田さんも、「見終わった後の視聴者のことを考えなくても、その時間にテレビの前にいる視聴者のことを考えればいいんだ」、としきりに感心している。「江田さんに話を聞いてスッキリしました」、と田中さんは、晴れ晴れとした表情で言う。

前章で考察したように【12月27日】の会議においては、勝田さんと田中さんは、スピードを優先するために情報を勝手に更新した江田さんの行動には不寛容さを示していた。ところが、この二人が【1月17日】の会議では、クオリティよりもスピードが大事であるという江田さんの言い分をすんなりと受け止め、さらには、「江田さんに話を聞いてスッキリしました」、と言う程に納得させられることになったのである。このことの原因としては、デザイナーやディレクターという職種に固有な層による基盤とは異なる、この会議そのものがもつ参加者の対話を支えるような雰囲気、会議の中で話されている事柄に確からしさを与えていたから、ということが考えられる。そこで次節では、会議そのものが備えている妥当性の雰囲気という観点から、当該の会議で生じたことについて考察する。

第二節 会議における妥当性の雰囲気

中田は、フッサーが示唆した「自我の自己触発」について、さらに歩を進めて、その内実を考察している。中田に従えば、自我は、「私がなす」という仕方では何らかの活動をすると同時に、「この活動と一体となって、全く受容的に『自己触発』されて存在している意識」¹²⁾として、すなわち、「自己被触発存在」¹³⁾と

して存在している、とされる。例えば、私たちが、千円札を1枚、2枚、3枚…と数えることができるのは、1枚目を数えるという活動と一体となって、1枚目を数えることにより受動的に自己触発されるからこそ、2枚目を数えるという活動が可能となる。もし、このように自我が、その都度自己触発されなければ、1枚目のあとに2枚目を数えようとしても、1枚目を数えたことが確かなこととして意識に保持されないために、もう一度1枚目から数え直さなければならず、結局、1枚以上を数えることはできなくなってしまう。中田は、このように何らかの活動と一体となって、活動自体が受動的に自己触発され、加えて、このことが主題的ではないが、自分自身にそれとなく知られているという意識の在り方を、自己被触発存在と呼ぶのである。また、自己被触発存在においては、一連の判断を連続的に遂行する際に、或る判断を遂行した私自身によって次の判断が保証されるために、「連続的に下される判断の妥当性を次々に保証していく妥当性の雰囲気として、高次の判断の妥当性を保証」¹⁴⁾することにもなる。

さらに、中田によれば、「一対一の対話を真に生きている者は、パートナーから委ねられたことを己れのさらなる対話行為に溶け込ませて包摂されるという仕方でも動的に引き受けなければならないため」¹⁵⁾に、一人でも動的判断を連続的に行なっている者と同様に、「常に変化していく自己被触発存在を妥当性の雰囲気とすることにより、事柄への己れの関与の仕方を自信をもって変えていく」¹⁶⁾、とされる。つまり、動的判断によって触発された自己被触発存在は、変化することのない一定の安定した妥当性の雰囲気に留まるのではない。すなわち、「そのつど産出される判断を妥当な判断」¹⁷⁾とみなすことにより生起する妥当性の雰囲気は、判断している者自身のそのつどの状況、すなわち「現在の状況」¹⁸⁾ともなっているからこそ、常に変化していくのである。すると、一対一の対話を生きている者においても、一人で千円札を数えている者においても、動的判断によって触発された自己被触発存在が、妥当性の雰囲気をそれぞれの判断者の現在の状況として常に変化することによって確からしさを連続的に保証している、ということになる。

以上のことを踏まえれば、当該の会議において、それまでの自説とは異なる江田さんの言い分を受け止めて理解することになった勝田さんと田中さんは、一方の対話行為が、「パートナーの対話行為に対して何らかの作用を動的に及ぼしていると同時に、パート

ナーの対話行為に依拠しているため、受動的に作用を蒙っている」¹⁹⁾という、一対一の対話をそれぞれに生きていることが理解される。そして、既述したように、一対一の対話を生きているときには、事柄そのものよりも事柄への己の関与の仕方が、パートナーに引き受けられる、ということが主題的にめざされている。そうであるからこそ、勝田さんと田中さんは、ウェブ編集部の価値基準を示して欲しいという二人の要求に対して江田さんが応えたこと自体に、なによりもまず満足して喜んだのではないだろうか。

また、勝田さんあるいは田中さんによる一対一の対話において、それぞれに妥当性の雰囲気形成されたことは、中田の記述に即せば、次のようにいえることになる。すなわち、勝田さんと田中さんは、江田さんから委ねられた解説を己れのさらなる対話行為に溶け込ませて包摂されるという仕方でも動的に引き受けなければならなかったため、常に変化していく自己被触発存在を妥当性の雰囲気として、勝田さんと田中さんのそのつどの現在の状況とすることにより、事柄への己れの関与の仕方を自信をもって変えていくことになった、と。勝田さんは、江田さんによる「番組が求めているのははっきりしていて、番宣とか、いつ放送するかとかいった前情報」との解説に対して、「前情報?」、とにわかに信じられないといった様子で聞き返している。すると、このとき勝田さんは、それまでに考えたこともなかったサイトの制作上優先されるべき事柄を、まず、自ら声に出して聞き返すという仕方、江田さんの解説を動的に引き受けた、と考えられる。他方、江田さんが、勝田さんの問いかけに対してもう一度、「前情報。誰が出るとか、リンクを幅広く貼ったり。……」、と答えたときには、さらにはっきりとした口調になっていた。すると、このときには、妥当性の雰囲気が江田さんの「前情報」についての前言の確からしさを保証していたことになる。その上で、江田さんは、勝田さんから委ねられた問いかけを動的に引き受けたからこそ、妥当性の雰囲気が江田さんの現在の状況となって変化することによって、江田さんは、一層自信をもって「前情報」について解説することになった、と考えられよう。

同様に田中さんが、「こういって、モヤモヤしていたものがふっきれた」、と答えたとき、田中さんは、それまでには考えたこともなかったサイトの制作上優先されるべき事柄についての江田さんの解説を動的に受け入れ、しかも、そのことによって変化した自己被触発存在を妥当性の雰囲気とすることで現在の

状況も変化していた、と考えられる。そうであるからこそ、「江田さんに話を聞いてスッキリしました」、と言うほどまでに、事柄への己れの関与の仕方を自信をもって変えていくことになったのではないだろうか。

以上のように、それぞれの一対一の対話において妥当性の雰囲気が生起し、彼ら自身の現在の状況が変化したからこそ、3週間前の会議では、佐藤さんと共にデザイナーの立場からクオリティという価値基準を主張していた勝田さんと田中さんが、当該の会議では、スピードという価値基準による江田さんの解説を受け入れることになったのであろう。

ところで、この日の会議では、議論している三人以外に、議論にはほとんど加わっていないディレクターの伊田さん（女性、30代前半）と植田さん（男性、20代後半）も参加している。前述したように、一対一の対話を直接生きている時にも、己れが委ねたことを間接的に引き受けている多数の他者の存在が意識されているという間接的対話をともなう一対多の対話が生じていたのであった。つまり、当該の会議において、勝田さんと江田さん、あるいは田中さんと江田さんによる一対一の対話が行なわれていたときに、議論に参加しないまま当の議論を見守っていた伊田さんと植田さんは、一対多の対話を生きていることになる。すると、一対一の対話を生きている三人と、一対多の対話を間接的に生きている二人にとって、議論されている事柄の妥当性は、異なって現われてくるのではないだろうか。

中田によれば、一対多の対話において聞き手に委ねられたことは、個々の聞き手の「引き受ける行為に溶け込んで包摂されてしまうことがない」²⁰⁾。そのため、一対多の対話における妥当性の雰囲気は、「この妥当性の雰囲気に基づくさらなる事柄の妥当性や事柄への関与の仕方の妥当性に決着がつけられるまでは、変化することなく」²¹⁾、それゆえ、聞き手自身の現在の状況も変化することなく、「留まり続けている」²²⁾、とされる。上述したように、そのつど動的な判断が下される一対一の対話においては、対話を行なっている者は、各判断がなされることに伴い妥当性の雰囲気が変化すると同時に、彼ら自身の現在の状況も常に変化していたのであった。ところが、一対多の対話における聞き手は、動的な判断をしていないのではないため、話されている事柄の妥当性はもとより、事柄に対する己れ自身の関与の仕方の妥当性までもが対話を生きている他のすべての参加者によって主題的に確認されるまでは、いわば保留の状態となってしまうのである。

それゆえ、聞き手自身のそのつどの現在の状況も変化することがない、ということになる。

このことに従えば、会議において一对多の対話が発現されているときには、聞き手としての参加者にとって、対話の事柄に対する妥当性の雰囲気や事柄に対する参加者の関与の仕方の妥当性は、決着がつけられるまで変化することがないために、参加者自身の現在の状況も変化することなく、保留されたままに留まることになる。すなわち、会議における一对多の対話においては、例えば、報告者が報告している事柄を、その他の参加者は、それぞれの仕方で引き受けることにより、たとえ「自分にとっての妥当性の雰囲気をそれぞれの仕方で変えようとも」²³⁾、間接的にその報告を聞いている他の参加者の関与の仕方は、各参加者にとって未知のままに留まってしまう。そのため、当の事柄に対する参加者全員の関与の仕方が主題化されるまでは、各参加者にとっては、「変化することのない妥当性の雰囲気」²⁴⁾が会議の場に留まってしまうことになる。それどころか、このような妥当性の雰囲気が、むしろ聞き手としての参加者の現在の状況となるような仕方で各参加者は会議に参加していることになる。すると、このような対話における妥当性は、一对一の対話を生きている参加者における妥当性とはまったく異なることになる。

当該の会議において一对多の対話を間接的に生きている、伊田さんと植田さんは、議論には参加していないため、江田さんから伊田さんと植田さんに委ねられたことを自らの引き受ける行為に溶け込ませて包摂してしまうことがない。そのため、たとえ江田さんの解説に対して、納得できない思いや反対意見を個々に持っていたとしても、伊田さんと植田さんの意識においては、そのこと自体が彼ら自身に何らかの思いを伴って抱かれていても、会議における個々の発言や対話行為に対する妥当性の雰囲気とはならなくなる。それゆえ、全員にとって主題的に確認された事柄に対する妥当性の雰囲気が、例えば、司会者による全員への主題的な確認によって問題となっている事柄に決着がつけられるまでは、変化することのない一定の雰囲気として、いわば、彼らの前に控えてしまい、一对一の対話を生きている勝田さんと田中さんにとっての妥当性の雰囲気に何ら影響を及ぼさないことになる。このことは、例えば、一对一で話しているときには相手の間違いを簡単に指摘できても、講演会の聴衆となって聞いているときには講演者の間違いを指摘しにくいことと同様の事態が生じている、と考えられる。以上の

ことからすると、会議の場が、参加者の妥当性の雰囲気に包まれているときには、そこで生じる対話においては、反対意見となるような参加者個々の価値基準を支えるところの層、すなわちデザイナーやディレクターという職種に固有な層は、いわば後方に退いてしまうことになる。

だが他方、一对一の対話において「能動的判断が連続的になされている時には、判断者のそのつどの現在の状況としての妥当性の雰囲気は、常に変化していく」²⁵⁾としても、会議が終了して参加者が日常の業務に戻ってしまえば、もはや、かつての会議において保持されていた妥当性の雰囲気は、維持されなくなる。【12月27日】と【1月17日】の会議では考え方を変えてしまった勝田さんと田中さんに、筆者は、後日確認したところ、二人には、江田さんの解説に納得したときの共感はすっかり消えてしまっていたのである。

第三章 妥当性を付与する他者の存在

第一節 対話の基盤となる層の変容

上記事例から2週間後となる【1月31日】の会議からは、デザイナーチームの中で動画の編集を担当しているデザイナーの須藤さんとデザイナーからディレクターに転向することになった木田さんが新たに加わることになる。

【2×××年1月31日 時間の感覚】

全員の報告が終わったところで、ディレクターの江田さん（男性、30代半ば）が、「あのね、明日アップ〔＝アップロード〕っていうときに、〔デザイナーが〕夜の10時とか11時とかに上げてくる場合があるけど、それって常識内の仕事じゃないでしょう、それで、一度時間について確認したいと思って」、と少し横柄な口調で話しはじめた。すると、デザイナーチームのリーダーである佐藤さん（男性、30代半ば）だけでなく、更新担当者の田中さん（男性、30代前半）、ディレクターの伊田さん（女性、30代前半）、今日初めて会議に参加した須藤さん（男性、30代前半）と木田さん（男性、20代後半）までもが一斉に笑った。佐藤さんは、「ディレクターが〔締め切り時間を〕言ってくれば午前中にだってアップできますよ、明日って言われて〔夜の〕10時とか11時が締め切りだとは思っていないけど、それは、まあ、人間の悪い癖で…」と苦笑いしながら応じた。江田さんは、全く笑うことなく真剣

な表情のまま、「だから、共通認識を持とうって言っているの」、と怒気を含んだ声で強く念を押した。その口調から江田さんは、これまで実際にあった締め切りに関するトラブルや、その時の苛立ちと怒りを彷彿させているかのようであった。江田さんのこの対応によって、参加者が一緒に笑っていた和やかな場の雰囲気は一変した。(中略)

勝田さん(女性、30代前半)は、江田さんの真意を確認するように、「結局、〔江田さんが言いたいことは〕何日締め切りは守ろうねってこと?」、と問いかける。江田さんは、勝田さんの質問に対して、「志が低いかな、みんな」、と答えると、勝田さんは不愉快な様子で、「締め切りが? 社会人として?」、と江田さんに向かってさらに問いかける。江田さんが、「というか、〔コミュニケーションをとろうとしても〕時間とかどこまでもずれていってしまうから」、と諦めたような口調で答えると、勝田さんが、「デザイナーが自由人すぎるようにみえるとか?」、と怒りを抑えるようにして無理に笑顔をつくりながら、追い討ちをかけるように質問する。(中略)

勝田さんが、「時間の共通認識をもとう〔ということ?〕」、と再び江田さんの真意を確認するための追究を始めると、その執拗な追究に根負けしたように、江田さんは少し態度を改めて、「俺もいけなかもしれないけど、その人の時間を束縛したくないわけね」、とこれまで自分が締め切りの時間をデザイナーに指定してこなかった理由についてへりくだって伝えた。すると、勝田さんも態度を改めて、「それはディレクターが決めたほうがいいです」、と言い、木田さんは、「決めてくれないと合わせられない」、と答えた。

ディレクターの江田さんは、番組サイトの予定公開日に公開できるよう時間に配慮して、デザイナーが作業を仕上げるのは当然のことである、と考えている。これに対して、デザイナーチームのリーダーである佐藤さんは、予定公開日に公開する必要があるのであれば、デザイナーの作業の締め切り時間をディレクターがあらかじめ指定するべきである、と考えている。既述したようにディレクターという職種に固有な層を支えている価値基準においては、情報のスピードが優先され、デザイナーという職種に固有な層を支えている価値基準においては、常にクオリティの保持が優先されるのであった。

ところが、この日の会議では江田さんの言い分に対して、デザイナーの佐藤さんだけではなく、ディレク

ターの勝田さんや木田さんも抵抗を示したのである。つまり、江田さんが職種に固有な層に立つときの基盤は、同じディレクターであるはずの勝田さんや木田さんには共有されていないことになる。では、そもそも対話の基盤となる層とは、どのように形成されているのだろうか。次節では、共に経験することについてのワルデンフェルスの記述を手がかりとして考察する。

第二節 参加者による共同の経験

ワルデンフェルスは、対話という「共同の活動をとおして一つの目的をともに追求するのは、われわれが共同の受容作用のなかでわれわれに与えられているものによって同時に刺激を受けているときだけ」(p.138)、と述べている。彼によれば対話とは、共通の事柄を前にして、同時に、汝が「我と相並んで」いるときの「共同の経験」なのであり、しかも、このような共同の経験は、「その同一のものが同一の世界のなかで、我々に対してただ単に潜在的に開かれてある」だけでなく、われわれを触発し、さらには、「われわれが関心をもって同一のものに向かって、同一の意味をとおして答え、それによってわれわれの外的かつ内的な注視の方向が収斂する」とき、また、「われわれが同一のものに関わっていることを同時に一緒になって認めあうとき」に実現されることになる (p.139)。

そうである以上、ディレクターに転向した勝田さんと木田さんは、以前からディレクターであった江田さんや相田原さんと、同一の問題や事柄に関わっていることを同時に一緒になって認めあうときにこそ、勝田さんと木田さんの共同の経験が達成されることになる。その際、同一の問題や事柄を共有するためには、同じ価値基準を支える職種に固有な層の上に一緒に立つことができなければならない。このことは、ディレクターの江田さんや相田原さんが、デザイナーの佐藤さんと共同の経験を達成する際にもいえるであろう。したがって、職種に固有な層は、職種に固有な共同の経験に支えられているのである。すると、共同の経験と職種に固有な層とは互いに支え合っていることになる。つまり、共同の経験によって職種に固有な価値基準と職種に固有な層が形成されると同時に、職種に固有な層の上に立つことによって、共同の経験が達成される。それゆえ、第一章で考察したような、ディレクターとデザイナーとの対話においてすれ違いが生じてしまうのは、それぞれが職種に固有な価値基準に支えられた層を基盤として対話を生きているからであり、また、この層自体が、共同の経験によって支えられて

いるために、一度形成されてしまうと、共同の経験を繰り返すことによってさらに強固な層へと発展するからである。このように職種に固有な層とは、その職種に就いたからといって自動的に形成されるものではないことが理解されよう。それゆえ、勝田さんや木田さんがディレクターに転向したからといって、自己の中にディレクターに固有な層が形成されるわけではないことになる。

そもそも時間にルーズなデザイナーのことが、ここで問題となっているのは、江田さんが常に「スピード」を最優先するディレクターであるからである。そして、このスピードという番組サイト制作上の優先事項は、【1月17日】の会議において、勝田さんと田中さんに一旦は受け入れられたはずであった。したがって、江田さんにとっては、これまでも問題となり、2週間前の会議では参加者の理解も得られたはずのスピードという優先事項について、いまだにデザイナーにはないがしろにされている状況があるからこそ、一層怒りを覚え、その結果、江田さんは横柄な物言いとなってしまうとも考えられる。ところが、当該の会議において勝田さんは、以前はあったはずの江田さんに対する共感もすっかり消え、真意を確認しようと執拗に追究する彼女の態度からは、江田さんに対する反発さえ見受けられる。また、「デザイナーが自由人すぎるように見えるとか?」、と感情を抑えるようにして問いかける勝田さんの様子は、江田さんがデザイナーに怒りを向けていること自体が納得できず、むしろデザイナーを庇っているようでさえある。すると、このときの勝田さんは、江田さんと同じディレクターという職種に固有な層を共有していないことになる。それゆえ、勝田さんは、ディレクターという層において、江田さんと共同の経験を達成することができない。

ところが、共同の経験においては、「自分自身の感性和他者の感性とは経験を共同に生きぬくなかで相互に入り組んで」(p.140)いる、とされる。つまり、自己の感性和他者の感性が相互に入り組むほどに、ある意味で、他者との深い関わりが必要となることになる。しかも、他者との共同の経験に対する共同性が豊かであればあるほど、共同の経験を通して他者によって支えられている層により一層妥当性が付与されることになる。そうである以上、会議における対話において、参加者は、それぞれに固有の層構造を成しているが、会議に共通する層も、参加者の職種に固有な層も、共に会議に参加している他の参加者との共同の経

験によって支えられているため、それぞれの層を共有する他者との共同の経験に対する共同性の豊かさに応じて、参加者が形成する層構造における各層を支える価値基準そのものの妥当性が異なることになる。このように、参加者が職種に固有な層でも会議に共通の層でも、層を形成する際には、一緒にそれらの層の上に立つことができるとともに、共同の経験を共有し、妥当性を付与する他者の存在が、重要な要素となることになる。

上述したように、ディレクターにおいてもデザイナーにおいても、確かにそれぞれの仕事を通じて共同の経験は生起し、それにより職種に固有な層が形成されている。ところが、同時にウェブ編集会議という場においても参加者にとって共同の経験が生起し、それにより会議に共通の層が形成されているのではないだろうか。そうであるからこそ、横柄な物言いをしていった江田さんとその江田さんの言い分に対して抵抗を示していた勝田さんが、事例のようなやり取りを通して、同一の事柄や問題に関わっていることを同時に一緒になって認めあったからこそ、互いに態度を変化させることができたのであろう。最初は怒りを表明していた江田さんも徐々に態度を軟化させて、自らがデザイナーに対して時間を指定してこなかった本当の理由について伝えたのであった。また、このような江田さんの変化によって、勝田さんもそれまでの攻撃的な追究から態度を一転させたのであろう。このことから、会議という共同の経験を通して、江田さんと勝田さんが基盤とする会議に共通の層が変化したと考えられる。

おわりに

企業の会議において、ディレクターとデザイナーという異なる職種に固有な層を基盤とする参加者同士の間では、対話の基盤とする層が異なるために全く話が食い違ってしまふことがある。他方、異なる職種に固有な層の上に立つ者同士の間でも、会議の妥当性の雰囲気によって、話されている事柄に妥当性が付与されることもある。さらに、職種に固有な層とその職種における共同の経験が相互に支えあっているのと同様に、会議に共通の層と会議という共同の経験も相互に支えあっている。それゆえ、共同の経験を経て、会議に共通の層そのものが変容すると、当初は食い違っていった対話の事柄に妥当性が付与されることも生じるのである。本稿における以上の考察により、企業の会議

における対話は、参加者が共同の経験を経て、役割意識を変容させる一契機となることが明らかとなった。

(指導教員 中田基昭教授)

付記 本稿は2007年度に東京大学大学院教育研究科へ提出した修士論文「企業の会議における対話の事例研究——相互主観性理論に依拠した層構造の解明」の一部を加筆・修正したものである。修士論文のみならず、本稿でも事例として使わせていただくことを快諾してくださったXテレビ局ウェブ編集長と編集部の皆様に、この場を借りて感謝の言葉を述べさせていただきます。

注

- 1) ワルデンフェルス, B. 「対話の中間領域」 山口一郎抄訳, 新田義弘・村田純一編, 『現象学の展望』, 国文社, 1986。なお, 本書からの引用及び参照に限り, 引用文の後の()内に頁数を記すことにより, その箇所を指示する。
- 2) 中田基昭 『授業の現象学』, 東京大学出版会, 1993, pp.11-12
- 3) 同上, p.12
- 4) 同所
- 5) 同所
- 6) 同上, p.13
- 7) 同上, p.16
- 8) 同上, p.19
- 9) 同上, p.14
- 10) 同上, p.15
- 11) 同上, p.19
- 12) 同上, p.129
- 13) 同所
- 14) 中田基昭 『現象学から授業の世界へ』, 東京大学出版会, 1997, p.433
- 15) 中田, 前掲書(1993), p.178
- 16) 同所
- 17) 同上, p.175
- 18) 同所
- 19) 同上, p.15
- 20) 同上, p.179
- 21) 同所
- 22) 同所
- 23) 中田, 前掲書(1997), p.438
- 24) 同所
- 25) 中田, 前掲書(1993), p.175